第 55 回日本鼻科学会

会長　春名　眞一（獨協医大）

平成 28 年 10 月 13 日（木）～15 日（土），宇都宮の栃木総合文化センターにて第 55 回日本鼻科学会を開催させていただきました. 約 860 名の登録者数があり，268 題の一般題（公募演題 7 題，講演 155 題，ポスター106 題）と非常に活気のある学会となりました．これも理事長をはじめとする学会役員および鼻科学会会員のご協力のおかげであり，心より御礼申し上げます.

濁協医科大学での開催は 3 度目であり，過去に古内一郎教授の下策 29 回を平成 2 年 9 月 27～29 日に, 馬場廣太郎教授の下策 40 回を平成 13 年 9 月 27～29 日に主催されました.

本大会のポスターは，日光来照宮の彫刻である“三猿　見ざる，開かざる，言わざる”をもじり,“三猿:鼻は隠さざる”と鼻の重要性を掲げました．そしてテーマは，ずばり“鼻科力を磨ぐです．そのために，基礎面ではハンズオンセミナーの内容をステップアップしで鼻副鼻腔組織を用いた基礎研究の進め方”をテーマとして, 若い先生の興味を涌かす 3 つの内容（ウエスタンブロット法, ラット・マウス鼻副鼻腔の解剖と免疫染色法）を企画し，神田　晃先生を中心に多くの先生のご尽力で，多数の先生が参加して好評を得ることができました. また講演では副鼻腔炎の病態の多様性および嗅覚病態をポイントとしました. 臨床面では, ESS の基本から拡大適応を目指しての講演とともに解剖と ESS ライブセミナーを企画しました.

招待講演は，アメリカからペンシルバニア大の James N Palmer 先生に“lmprovement Surgery and Topical Treatment for CRS” を講演していただき，またブラジルからは Marcio Nakanishi 先生に“Precision Medicine in Chronic Rhinosinusitis：Updates and perspectves”を講演していただき，南北アメリカ大陸の最新の副鼻腔炎の臨床の知見が得られたと感じております. 上下気道連携として喘息医である国立相模原病院の谷口正実先生に“アスピリン喘息と好酸球性副鼻腔炎の病態 Update”を講演していただき，今後の上気道の研究のステップアップにつながる内容であったと感じました．医工連携として，栃木県発の医療機器マニー会社社長の松谷正明氏には“世界一の品質の医療機器を目指してについて”講演していただきました．既にマニー開発の鼻中隔縫合機は実用化しており，現在，鼻内用のメスの開発を行っております.

最近の日木鼻科学会はかなり国際色が豊かで，今回も総勢 20 名程度の海外の先生方に訪日していただきました．日韓鼻科学会のスペシャルレクチャー，合同セミナーや lntemational Session で，６名の韓国の先生方に発表していただき, 中国の Luo Zhang 先生には“why do the endotypes of CRSwNP matter?”，香港から来年の ISIAN 会長の Michael Tong 先生には“Medical robotic research in the Chinese university of Hong Kong and its appncations in Rhinology”，フィンランドの Sanna 先生には“Translational research f1）r sinonasal disorders” について講演していただきました．例年，英語のスピーチには日本人の聴衆が少ないのが常でしたが，今回は活発な質疑があり，大いに有意義であったと感じております.

シンポジウムは基礎領域では，清水猛史先生と池田勝久先生の座長で「鼻粘膜上皮の炎症制御機能の新展開」について４名の先生方（金谷洋明，中村真浩，岡野光博，神前英明）に最新の研究について発表していただきました．また臨床領域では，野中　学先生と吉川　衛先生の座長で，現在最も治療に悩んでいるテーマ「好酸球性副鼻腔炎をどのようにコントロールするか」を５名の先生（浅香大也，今野　渉，瀬尾友佳子，小林良樹，坂下雅文）に，手術的治療と保存的治療について討論していただきました．まだまだ明確な回答はありませんが，今後に期待をもてる発表内容でありました．パネルディスカッション１では，医療過誤委員会で常に話題に挙げられる ESS の副損傷の問題に照らしで鼻内視鏡手技の技術認定制度に向げを友田幸一先生と鴻　信義先生の司会で，４名の先生（鈴木賢二，朝子幹也，飯村慈朗，友田幸一）に今後の指針作りの基盤を議論していただきました．パネルディスカッション２では，国際学会で話題である副鼻腔炎病態の多様性について“Evidence に基づいたわが国における副鼻腔炎病態の多様性”について藤枝重治先生と竹内裕美先生の司会で４名の先生（中山次久，高林哲司，野中　学，竹野幸夫）に発表していただきました．欧米と本邦との病態の違いが指摘されました．パネルディスカッション３では三輪高喜先生と小林正佳先生の司会で“嗅覚障害の病態と治療の進歩”を４名の先生方（志賀英明，飯嶋　睦，小河孝夫，奥谷文乃）に講演していただきました．女性医師セミナーとして飯野ゆき子先生の司会で，子育て中でもアクティブに研究を続ける二人の先生（清水志乃，牧野伸子）の発表内容に感銘いたしました.’モーニングセミナー１では手術手技セミナーを出島健二先生の司会で，慈恵医大の形成外科教授宮脇剛司先生に鼻中隔手術を，竹林宏記先生

に DCR について講演していただきました．モーニングセミナー２では鼻腔生理セミナーを４名の先生方（大木幹文，長谷川誠，中島逸男，厚見　拓）に講演していただきました.ESS 拡大適応として頭蓋底と乳頭腫に対するアドバンス手術セミナーを丹生健一先生の司会で二人の先生（花渾豊行，都築建三）に発表していただきました．

本学会の目玉として，濁協医大の解剖学教室および手術室から学会会場へ，live での凍結標本の ESS 解剖実習と実際の手術を企画しました．中川隆之先生の司会で，鴻信義先生に“ESS に必要な鼻副鼻腔～頭蓋底の解剖と組子操作の知識”を，そして森山　寛先生の司会で，会長春名偉一が“実際の ESS の基本手技を学ぶ”を濁協医大から会場へ供覧いたしました．多くの先生方にご満足いただけたのではないかと自負しています．

９つのランチョンセミナー（舌下免疫療法，内視鏡下副鼻腔手術，嫌気性感染症，第二世代抗ヒスタミン薬，マクロライド療法，ESS，アレルギー性鼻炎の薬物療法）で，お弁当もなるべくご当地特産物を用意しました．

最後に，三重大学名誉教授の坂倉康夫先生のお別れの部屋を準備させていただき，多くの先生方が坂倉先生のご活躍を思い出されていました．謹んで先生のご冥福をお祈りいたします．

次回の本学会は，平成 29 年 9 月 28 日（木）～30 日（土）に増山敬祐会長（山梨大）の下で甲府富士屋ホテルにて開催されます．今回以上の盛会になること，そして本学会のますますの発展を切望いたします．